

2013年9月12日

## 滝久雄基金海外活動助成 活動報告書【2013・夏】

東京工業大学工学部電気電子工学科4年

国際開発サークル IDAcademy の活動の一環として、滝久雄基金に助成を頂き、フィールドトリップを行った報告を以下に致します。

### 1、活動概要

「ベトナム国ダオケイトン村におけるノンラーを用いた新プロダクト開発プロジェクト」と題して、3人のメンバーでベトナムのハノイとダオケイトン村に2週間滞在し、商品開発・生産と販売網の確保を行いました。

【期間】8月20日～9月2日

【目的】1、滞在する村でのノンラーをモチーフにしたお土産品の製造  
2、製造したお土産品の販路確保（前回訪問したお土産品店や現地 NGO など）

### 2、主な滞在・訪問場所

・ハノイ市内に販売店を構える少数民族が作成したプロダクトの販売をしている現地 NGO 「CraftLink」

- ・ハノイ市内にある卸売市場ドンスアン・マーケット
- ・ナムディン省にあるダオケイトン村（今回の滞在先）
- ・ハノイ市内のお土産品店
- ・ハノイ市内の材料品店

### 3、ハノイ市内での活動まとめ

ハノイ市内では、まず初めにアポイントをとり、前回、訪問した現地 NGO 「CraftLink」を再度訪問し、日本で作成したプロダクトのフィードバックを頂きました。お店に置くには、生産者の情報や個数など、組織の要求する条件を満たす必要があるとのことで、ハードルが非常に高いことを指摘されました。このフィードバックを基に、材料をハノイ市内にある卸売市場ドンスアン・マーケットで購入し、再度滞在先のホテルでプロトタイプ作りを行いました。（ミシンは、日本から持参したものを使用しました。）そして、新たに2～3個のプロトタイプを作成し、ハノイ市内を後にし、ノンラー生産者のいるダオケイトン村にバスで向かいました。現地 NGO からの指摘は、手厳しいものでありましたが、自分達の足りない所を指摘されたと自覚し、このフィードバックを前向きに捉え活動することが出来ました。



図1：現地 NGO「CraftLink」



図2：卸売市場ドンスアン・マーケット

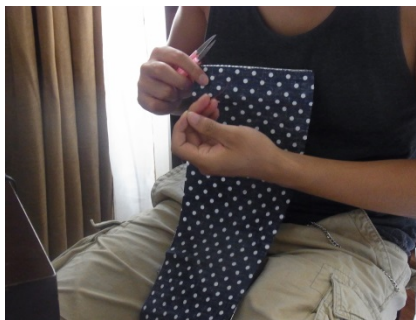


図3：ホテルでの作成の様子



図4：プロダクト完成の様子

#### 4、ダオケイトン村での活動まとめ

プロトタイプ製作と材料の購入をハノイ市内で終え、市内のバスを利用してノンラー生産者のいるダオケイトン村に向かいました。移動には、現地の大学生に協力してもらいトラブルなく移動することが出来ました。

村では、事前に連絡をし、話をしていたノンラー生産者の方に集まってもらい、滞在中に共に、ハノイ市内で改善を加えたプロトタイプを生産しました。ドンスアン・マーケットで購入した生地と糸を用いて、様々な色のプロダクトを作成しました。色の選択などは、ノンラー生産者の意見を取り入れ作成しましたが、こちらの意図していた「ノンラー生産者が自主的に製作を行うということ」は実現できず、こちらが作成を依頼し作成の謝礼金（労働対価）を支払うという形になってしまいました。この点から、生産者のメリットになるということを十分に伝えきれていないと、作成の動機付けを行うことは、非常に難しいということ学びました。



図5：村の様子



図6：生産の様子



図7：ミニノンラー



図8：業務用ミシンでの生産の様子



図9：完成品

## 5、ハノイ市内でのお土産品店での活動まとめ（途中松川帰国）

試験販売として、村で作った商品のうち、完成度の高い9個をハノイのホアンキエムエリアのお土産店に持って行きました。

前回の渡航で、商品を置かせてもらえたお店を含め5つの店舗を回り、結果3つの店舗で置かせてもらうことになりました。そのうちの1店舗では、一つ300円で買い取ってもらうことが出来ました。生産コストから考えると十分な金額だと考えられます。買い取って頂いたお店は、前回置いてもらった商品も2~3個売れたようで、その点も良い影響を与えられたようです。お店に商品が好意的に受け入れられた点を考えると、一定の成果と言って良いのではないかと思います。



図10：販売店



図11：商品の様子

## 6、今後の活動について

今回は、前回の渡航を踏まえプロダクトの改善を目標に渡航しました。前回は、材料を日本から持っていき、ワークショップを開き、ノンラー巾着を作成し、今回は、ノンラー

をモチーフにしたペットボトルホルダーを作成しました。

メンバーの大半が今年に卒業（二人は夏に卒業）してしまうため、今回の渡航を一つのプロジェクトの区切りだと考えています。お土産品を作ると決めてから、2回の渡航を終え、ある一定の形としてプロジェクトを終えられたのではないかと考えています。商品のクオリティとしては、もう少し改善の余地が残っていますが、メンバーとの話し合いの結果、これでベトナムPJとしては、完了としたいと考えています。プロジェクトの中でお世話になった方々とは、これからも連絡を取り合っていきますので、このプロジェクトの経験・人脈が今後生きていくよう学生生活、社会人生活共に頑張っていきたいと思えます。

## 7、おわりに

当初の目標で達成できなかったものもありますが、現地で材料を調達し、村の人たちを巻き込んで商品を生産する経験は、通常では体験出来ないもので自身の成長につながったと実感しています。

滝久雄会長をはじめ、寛大にこのような機会を与え、実現に協力して下さった関係者の方々に、改めてここに謝意を表します。